

で圧力容器の圧力を下げ、そののち、道路が空いていたときに別の場所から到着していた高圧消防車を使って注水するよう、チームに指示した。しかしすでに、三号機は一時間にわたって冷却されておらず、危機的的局面に入っていた。午前六時頃、HPCIとRCCを再始動させる最後の試みに失敗し、吉田は、三号機の緊急冷却ができなくなったことを東京に報告する以外になくなった。

正確な時間は少々不確かだが、三月二三日午前九時頃、燃料棒が露出し、三六時間ほど前に一号機で起こったのと同じ一連の事象が引き起こされた。すなわち、燃料が過熱し、燃料被覆管が酸化し、水素が発生し、核分裂生成物が放出された。そして三号機の炉心が溶融し、圧力容器と格納容器の圧力が急速に上昇した。まるで悪夢の繰り返しのように、作業員はまたしても緊急に、格納容器をベントして圧力を下げ、炉心の損傷を食い止めるために補給水を注入できるようにしなければならなくなった。

運転員は時間に追われながら、ベントをするために、格納容器と排気筒をつなぐ配管の弁を開けようとしたが、高温の原子炉内部の圧力上昇には追いつけなかった。いまや、二基目の原子炉の運が尽きたように思われた。

三時間経ってようやくベントが始まり、格納容器の圧力が下がった。すでに炉心の損傷が始まっており、高レベルの放射性物質がベントされて、敷地境界での放射線レベルが急上昇した。しかしまもなくして、ようやく安全弁を開けて原子炉の圧力を下げることができ、新たに防火槽の淡水を炉心に注入できるようになった。しかし淡水の量が少なくなり、吉田は所員に海水へ切り替えるよう指示した。正午すぎ、淡水の蓄えが底をつき、所員は急いで海水のラインをつないだ。一時間で海水が流れはじめた。しかし、やはり量があまりに少なく、またあまりに遅すぎた。計器の表示によれば炉心は依然として露出しており、燃料を再び覆うだけの水が圧力容器に入っていないことがうかがわれた。放射線レベルは上がりつづけ、共通制御室の三

号機側で一時間あたり二ミリシーベルトに達した。

この災害が時々刻々悪化しているようだという懸念が、日本中で高まりつつあった。日曜日の夜、東京電力の役員が記者会見を開いた。会社の青色の制服を着た清水社長は国民に謝罪し、「想定を超える津波だった」と語った。そして二週間ほど人々の前から姿を消し、国内外のメディアにさまざまな憶測を与えた(のちに東京電力の役員が、清水は過労で体調を崩していたと説明した)。しかし、どうやら清水は意志決定に関わりつつけていたらしい。やがて、清水と菅首相が意見の相違で衝突している様子が、広く報じられることとなる。

福島第一原発の混乱した緊急対策室でも、東京電力の経営陣の肩を持つ人は一人もいなかったらしい。本社と現場との会話を録音したテープからは、意思疎通の欠如が明らかとなっている。

日曜日早く、本社は一〇〇〇台の予備のカーバッテリーを注文していたが、政府から高速道路利用の許可をもらうのが遅れたため、発電所への輸送が何時間も滞った。日曜日の夜にはまだ輸送途中だったが、すでに従業員の車やトラックのバッテリーが使われていたため、追加のバッテリーの必要性が危機的なところまで高まっていた。午後七時一五分頃、福島第一原発の構内放送で大声のアナウンスがあり、バッテリーの購入のための資金が不足しているため、貸してくれる人を探している、と呼びかけた。

吉田は、深刻化しつつある危機に対応する責任を負っているが、上司たちから、事務作業をつつがなく続けるよう求められた。前の晩、東京電力本社は疲れきった吉田に、夜勤の当直班のスケジュールを提出するよう電話で指示した。そのときちょうど一号機原子炉に水を注入しようと格闘していた吉田は、当初は応じなかったが、本社は引き下がらなかった。所員は誰も帰宅していなかったため、吉田にとっては彼らが起きているのか寝ているのか、ということを知られているようなものであり、吉田はそのように答えた。本社

第3巻 2011年3月14日 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺